

歌集
白木
黒木

前川佐美雄

歌集

白木黒木

前川佐美雄

角川書店

白木黒木



昭和四十六年十二月二十日 初版発行

著者 前川 佐美雄

発行者 角 川 源 義

印刷所 奥村印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二ノ十三

振替 東京一九五二〇八

電話 東京（二六五）七一一（大代表）

郵便番号 一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0092-871029-0946(0)

目次

昭和四十一年

新	春(三首)……………九
寒 鹿	抄(六首)……………一〇
ことつづき	(十一首)……………一二
冬 の 幻	(八首)……………一五
初 午	(五首)……………一八
をがたま	ま(五首)……………二〇
勿来まで	(十八首)……………二三
仙 台 抄	(二首)……………二七
秋保温泉抄	(二首)……………二六
つつじ祭	(三首)……………二九
近 江 春	(七首)……………三〇
飛鳥川上	(三首)……………三三

雲 雀 語	(五首)……………三三
鳴 門 の 月	(八首)……………三六
星 族	(五首)……………三八
室 生 龍 穴	(三首)……………四〇
矢田金剛寺	(五首)……………四二
甘 欖 丘 月 見	(三首)……………四三
秋 の 海	(十三首)……………四四
枯 れ 薦	(八首)……………四八
国 栖	(三首)……………五一
白 木 黒 木	(八首)……………五三
残 亡 抄	(十三首)……………五五
嵯 峨 菊	(七首)……………五九

星まんだら(七首)……六
東征絵伝(五首)……三

森の奥(十一首)……壹
師走(二首)……六

昭和四十二年

冬 ばら(四首)……七
格 衣(五首)……三
飛 鳥 冬(五首)……壹
冬 の 日(五首)……七
節 分(三首)……七
修 二 会(二十首)……八
法隆寺会式(三首)……六
春日の藤(五首)……七
葛城あたり(三首)……六
六月小情(三首)……六

みむろ夏(五首)……九
稻荷初夏(八首)……三
曾爾古道(三首)……六
奥飛鳥みち(三首)……七
春日九月(三首)……六
黒部の紅葉(八首)……九
国なかの村(五首)……一三
朝時雨(四首)……一四
柿(五首)……一六

昭和四十三年

寒 牡丹(五首)……二
大和新年(三首)……三

紅霞(五首)……一四
冬の鹿(八首)……一六

昭和四十四年

若草山焼(二首)……一六
 穴師の里(五首)……一三
 京の病院より(三首)……二三
 秋(三首)……二三
 晩年に似る(十二首)……二四
 野良猫(五首)……一六

玉(五首)……一三
 春(四首)……一四
 新蓬序(五首)……一四
 金魚祭(九首)……一四
 四天王寺(四首)……一三
 葛城(十首)……一五
 一言主(五首)……一七
 松の花(十一首)……一五
 雨の日(十四首)……一三
 運命(五首)……一六

火焚祭(七首)……二五
 女児(二首)……二三
 寒くなりつつ(九首)……二三
 錦木(四首)……二五
 檜原の岡(五首)……二六

白鳥抄(二首)……一六
 須磨即事(五首)……一六
 伊豆にて(二首)……一七
 城が島(四首)……一七
 人ならぬ鹿(三首)……一五
 西行庵(五首)……一五
 多賀(二首)……一七
 十一月九日(四首)……一六
 檜の实(十七首)……一八
 枝折戸(十一首)……一五

紅 葉（九首）……一八

冬日あまねき（十首）……一九

昭和四十五年

冬 漢 々（二首）……一九

田 植 祭（五首）……二四

冬 の 日（二首）……一九

奈 良 坂（三首）……二六

時雨する日（五首）……一九

梅 雨 久 し（四首）……二七

冬 鳥（十三首）……二〇

近 江 石 塔 寺（三首）……二九

冬 平 城 宮 址（五首）……二五

暑 き 日（五首）……三〇

ひんがしの火（四首）……二七

涼 気（四首）……三三

花 寒 し（九首）……二九

天 の 川（五首）……三四

みささぎ道（五首）……三三

初 秋（五首）……三六

おつくう（十一首）……三四

秋 の 日 に（五首）……三六

雑 念（十一首）……二七

晩 秋（十三首）……二四〇

春 あらし（三首）……三〇

古 吉 野（十一首）……二四

奥 千 本（三首）……三三

後 宴 能（五首）……二七

東 山 中（四首）……三三

後 記

白
木
黒
木

昭和四十一年

新春

いさぎよきこと少し有^あなれ古家の煤はらひし
て春を迎へぬ

あたたかき正月よなと遠出して霜とくる飛鳥
古国を行く

新しき年の朝明^{あさけ}も数千羽まだ暗き空を鳴きわ
たりたる

寒 鹿 抄

ひとら去りにはかに寒く暗くなる苑のなか鹿
の尾尻＊じりがさびし

暗くなる杉の木の間に西空の黄が透＊けて見ゆ
身窄みすばまるなり

靄くらき木の間出で来て黄いろなる枯れ芝生しばふ
行く影の如くに

かれ芝の苑のみち行く日ぐれがた見覚えのあ
る鹿も居りにし

苑のなかわれの知り^しをる鹿ひとつこの鹿も角
を伐^きられてみじめ

かつ憎みかつあはれみし片角^{かたづの}のかの荒き鹿の
冬いかにある

ことつづき

早や冬の野極に狩りし一羽とてうづ巻く青の
尾羽のながきを

言連接点爾袁波いかに枯れ蔦のしじにからめ
る壁を見つめて

わがうちの鬼遣らはむと踏みはづし階落ちし
夢の胸痛き朝

枕べにすはりて夜夜を眠らさぬこのわが鬼を
救はせたまへ

朝を機嫌悪しきは血圧低きため猫さへ知れば
あかり来らす

年の暮れを橐駝来てをり何ごともなき如くな
り鋏の音す

かひ臭きフルーチースに胃弱きを養ひて我の
冬をあるなり

庭石を動かしをるもこの家に火^ひつけたくなる
心堪へむため

空あをく澄めり大脳前頭葉いかにはたらく壁
はすかひに

家壁のくづるる知らず蔦づるの紅葉しばらく
美しかりし

あざわらふ低き声ごゑ木の上^へより石の間^まより
聞ゆるものを